

自我の構図

三浦綾子

長編小説



長編小説

自我の構図

三浦綾子

7

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編小説 自我の構図

¥ 570

昭和47年7月10日 初版発行

著者 み 三 浦 綾 子
北海道旭川市豊岡二条4丁目
発行者 五十嵐 勝 彌
印刷者 堀 内 文 治 郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀 内 印 刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替 東京115347 電話 東京(942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(複本製本)

© Ayako Miura 1972

(分)0-0-93(製)92002(出)2271 (0)

自我の構図

三浦綾子



装
幀

堀^{ほり}

文^{ふみ}
子^こ

目次

愛の誤算	捕虫網	石の陰	パリからの遺書	スケッチブック	天人峽
220	177	130	82	55	5



之

天人峽 てんにんきょう

一

「藤島、きようはまたいやにあったかいなあ。十月半ばだとは思えないねえ」
南慎一郎は、車の窓をあけながら、ハンドルを握っている同僚の藤島壮吉を、ちらりとうかがうように見た。

藤島壮吉の唇が、ひくひくと神経質にふるえている。それは、藤島が機嫌の悪い時に見せる表情であった。慎一郎の言葉に藤島は答えず、右手でたばこをくわえた。右のひじを窓枠にちよつとのせ、藤島は車を走らせている。スピードメーターがぐんぐん上がる。九十近いスピードだ。
(荒れているな)

慎一郎はふっと不安を感じた。

車はすでに旭川市内を離れて、二十キロほどの直線道路を天人峽に向かって走っていた。刈り取られて、白茶けた稲田。稲架襖の向こうにつらなる、新雪をかぶった十勝岳の連峰。黄ばみかけたポプラの木立。実も葉も真っ赤に色づいたナナカマドの並木。それらの風景に、慎一郎は不安を押し殺すように視線を向けていた。

雲一つない晴れた空だ。上川盆地の四囲の山々の稜線が、くっきりと美しい。こんなに天気がいいというのに、何が藤島を不機嫌にしているのか。

昨日、藤島壮吉が自分をドライブに誘った時の言葉を、慎一郎は思い出した。

「天人峡の紅葉がすばらしいそうさ。絵を描きに行かないか」

その時の藤島は、ふしぎなほど上機嫌だったのだ。

（自分から誘っておいて、何を黙りこくっているんだ）

こんなことなら出て来るのではなかったと、慎一郎は少し憂鬱になった。その時、藤島は、さらにスピードを上げたかと思うと、前方を走っている大型のトラックを追い越した。

「あっ！」

思わず慎一郎が叫んだ。前方から、バスが大きく目の前に迫ってくる。ハッと体を固くした瞬間、バスは路肩すれすれに避けて、危うく衝突はまぬがれた。

「馬鹿野郎！ 気をつけろ！」

大声でバスの運転手がどなった。乗客たちも窓から顔を出して、何か喚いているのが、うしろから聞こえた。

「危ないじゃないか、藤島！」

慎一郎は本気で怒った。胸が大きく動悸していた。藤島は眉も動かさずに、無表情に車を走らせている。

「おい、危ない真似はよせよ」

「ふん、危ないか。南、お前はまだ死ぬには命が惜しいか」

藤島はうすら笑いを浮かべた。車はやや、速度を落とした。

「あたりまえじゃないか。俺はまだ三十四だ。妻も子もいる。生徒たちもいる。命は惜しいよ」

「それに名誉もあるしな、南には」

藤島は嘲笑するようにいった。

「名誉？」

「そうだよ、日展入選、しかも協会賞に輝く入選だ」

「それが名誉か」

慎一郎は笑った。藤島がじろりと横目で慎一郎を見た。

「そうか、お前には協会賞も、それほどの名誉じゃないというわけか」
陰気な声だった。

南慎一郎は旭川北成高校ほくせいの国語教師である。藤島はその同僚の美術教師だった。この藤島壮吉から、絵の手ほどきを受けたのは、今からもう七年前のことだった。

藤島は慎一郎より三つ年長だった。当時まだ三十歳だったが、すでに日展にも入選し、道内では新進の日本画家であった。

藤島は冗談のつもりで、慎一郎に絵を描かないかと誘ったことがあった。慎一郎は高校時代、

絵画部にいたこともあって、すぐに乗り気になり、放課後藤島に日本画の手ほどきを受けた。その慎一郎が、意外な上達を見せ、二年後には早くも道展に入選し、翌年、翌々年と続いて入選、知事賞をさえ獲得した。

その慎一郎に、藤島は昨年、日展への出品をすすめた。しかも、画題は藤島の妻の美枝子だった。藤島の画室で、その美枝子を共に描こうというのが、藤島のすすめだった。

なんのために、藤島自身の妻を自分に描かせようとしたのか、慎一郎には納得できなかった。いや、納得したくなかったといったほうが、本当かもしれない。藤島の妻の美枝子は、知性的な美しい女性だった。その美枝子を、藤島と共に描きながら、今までにない描くことの喜びを、慎一郎は感じた。

青い和服の襟をゆったりとくつろげて、ソファに腰をかけている美枝子の自然なポーズは、描き終わるまでの幾日もの間、まったく変わらなかった。それは明らかにひとつの力でもあった。その力が、自分の絵に新しい命を注いだのだと、慎一郎は思いたかった。そしてそれが、かつてなかった喜びを自分に与えたのだと、慎一郎は思いたがっていた。が、心の底で、美枝子に傾斜していく自分を認めないわけにはいかなかった。それはしかし、自分の胸のなかの奥深い所にある、誰も知らない想いだと、慎一郎は思っていた。

「日展初出品、協会賞に輝く初入選。旭川北成高校国語教師に栄冠」
思ってもみない結果が、新聞の地方版に大きく報じられた。一方、藤島壮吉の絵は落選した。

あれからすでに一年は過ぎた。二人の間に、何事もなく一年が過ぎ、きょう、慎一郎は誘われて共にドライブに出かけて来たのである。

車はいつしか山沿いの道にさしかかっていた。大雪山だいせつざんがぐっと近づき、白雪の頂きにつづく紫紺の中腹、そしてその麓ふもとには赤と黄に映える樹林がつづいていた。

「どうした、黙りこんだな、南」

藤島はふだんの語調に戻っていた。

「ああ」

慎一郎は藤島を見た。藤島の唇には、あのひくひくとしたふるえは消えていた。

「藤島、君はさっき、ずいぶん荒れていたじゃないか」

「そうか、荒れていたか……実はさ、美枝子の奴やつがね……」

藤島はニヤリと笑った。が、たちまち彼の顔はひきしまった。

「美枝子さんがどうかしたのか」

「いや、つまらんことさ」

藤島は窓からペッとつばを吐いた。

「つまらんこと？　そうか、例の犬も食わないという奴か」

慎一郎は少し気が軽くなって、

「夫婦げんかのとばっちりで、無謀運転をされちゃ、はたの者が迷惑だよ」

「……………」

「まったくいい天気だなあ」

「……………」

車は再びスピードを上げはじめた。

天人峽に着いた二人は、峽谷にかかった吊橋つりばしの手前で車を降りた。

〈叩けばカンカン音のするような空だ〉

そんな詩が、昔の小学校の読本に出ていたと思いながら、慎一郎は青空を見上げて大きく深呼吸をした。左手に柱状節理ちゆうじょうせつりの岩壁がそびえ、右手に体まで染まりそうな紅葉の山が迫っていた。溪川の音が耳にひびいた。

「自然の威圧という奴か」

藤島はズボンのポケットに両手を突っこんだまま、つぶやいた。

「ああ、天人峽って、いつ来ても無気味な美しさがあるね」

「無気味か」

藤島がニヤリと笑って、

「なるほど、無気味だな。俺も初めてここにきた時、何か地球の底にでも押しこめられそうな、妙な感じを持ったものだ」

藤島は珍しくやさしいまなざしになって慎一郎を見た。やさしいというより、気弱なといった

ほうがよかったかもしれない。弱々しい微笑を見せて吊橋に向かう藤島を、慎一郎はなんとなくため息をついて見た。

二人は、吊橋の真中に立って川を見おろした。水はこれ以上澄むことはできないような、清らかな水だった。いや、澄むという形容は、引きこまれそうに青い水の色には、似合わないかもしれない。澄んだ水がなぜ青いのか、慎一郎はふしぎだった。大小の岩に砕けて、水は純白の飛沫^{ひまつ}を上げる。じっと見つめていると、水の様相は常に変化していた。どうどうとひびくその流れの音が、他の物音を遮断^{しゃだん}していた。他の音を遮断するほどの大きな溪川の音の中に、ふしぎな静けさがあった。音が作る密室を、慎一郎は感じながら、ふっと美枝子の形のいい唇を、なぜか思い出した。

「おーい」

突然、藤島が大声で叫んだ。誰か知った人でもいるのかと、慎一郎はあたりを見まわしたが、ただ美しい紅葉と、岩壁と、溪川があるばかりである。

「おーい」

再び藤島が叫んだ。

「どうしたんだ、藤島」

「なんでもない。ただ、叫んでみたかったんだ。人間には、叫びたいものがいっぱい詰めこまれているからな」

「なるほどね」

慎一郎は、今、美枝子の唇を思い浮かべていた自分を、指摘された思いだった。

「お前にだって、叫びたいものがあるから、絵を描いているんだろう、南」

「そうかもしれない。しかし、君だって、その叫びを絵にじゅうぶん表現しているから、いいじゃないか」

ちかりと藤島の目が光った。

「南、絵で叫ぶことのできるの、俺ではなくて、お前だよ。俺には……」

藤島は唇をかんだ。が、このとき慎一郎は、藤島の目の光も、唇をかんだその表情も見なかった。慎一郎の目が、けんらんたる紅葉と、溪川の流れに奪われていたからだ。慎一郎は、藤島のこの言葉の重さに気づかなかったのだ。

「人類は、叫ぶことと、絵を描くことと、どっちを先に覚えただろう？」

慎一郎がいった。

「むろん、叫ぶことだよ。人間どもは、獣けもののように大声で喚いてきたんだ。切なかっただろうなあ。言葉もなく、ただ叫んでいるということとは」

そういって、藤島は再び、

「おーい」

と叫んだ。

橋を渡って、ホテル天人閣の前に立った時、慎一郎はいつものことながら、ギョッとする思いだった。

川の向こうに、幅三十メートル、高さ七十メートルもあるであろうか、鉄に油でもぬったような、幾分湾曲した真っ黒な岩壁が、あらわにその肌をさらしていた。それは巨大な鍋なべの底に立って見る一部のようにもあった。見ているだけで、その岩壁をずるずると谷底へ落ちるような錯覚を、慎一郎は感じた。

「おい、南、あの青空と、楓かえでの赤を見ていると、女の着る裾模様すそもようを思わせるじゃないか」

藤島のいった言葉が、慎一郎には何か唐突に思われた。慎一郎は黒い岩壁から、紅葉の木々に目をやって、

「ああ、そうだね」

と、うなずいた。うなずいてから、藤島が美枝子のことを思っているのだと、慎一郎はやっと気づいた。慎一郎の心がうずいた。なるほど、あの美枝子に青地の裾模様は似合うだろうと思つた。グリーンを着せればグリーンが、そして白を着せれば白が、まるで美枝子のために存在している色であるかのように、何色でもよく似合う女だった。赤だけは似合うまいと、なんとなく思っていたが、ある雪の朝、真っ赤なセーターに黒いストラックスをはいて、雪はねをしている美枝子を見た時、慎一郎は、まったく自分の想像が誤っていたことを知ったのだった。

慎一郎は、自分の手描きの着物を美枝子に着せてみたいと思つた。藤島も、同じことを考えて

いるかもしれない。ぶらぶらと肩を並べて歩きながら、慎一郎はいま、妻の由紀のことを一度も考えていなかった自分に気づいた。由紀の無邪気な性格を、慎一郎は愛しているつもりだったが、美枝子とくらべると、あまりにも由紀は刺激のない存在でありすぎた。

（妻とは、自分にとっていったいなんなのだろう。やはり女性なのだろうか）

妻は自分にとって女性であるよりも、必需品に近い存在のように思われた。最も性の対象であるべき妻が、結婚後五年もたたぬうちに、そのような存在になったことに、慎一郎は不可思議な思いを抱いた。由紀と結婚する時、由紀は自分にとって、どの女性よりも魅力的で愛らしい女性であった。いつ、いかなる時から、妻は自分にとって女性ではなくなったのか。

（美枝子さんも、藤島にとっては女性と感じ得ない存在なのだろうか）

慎一郎は、一步先を歩いて行く藤島のがっかりとした背に目をやった。藤島にとっては、やはり美枝子は最も愛する女性であるかのように、慎一郎には思われた。

「人が少なくて、よかったじゃないか」

藤島がふり返った。

「ああ、本当だね」

慎一郎はなんとなくうろたえて答えた。天気の良い割りに、人はあまり来ていなかった。時折り、二人三人にすれ違うだけである。きょうは水曜日だった。日曜日に研究授業をした代休で、北成高校は休みだったのである。